

縁 起

「五六豪雪」（昭和五十六年）を上回った地域もあつたと言われた平成三十年の北陸豪雪だつた。その雪も漸く融けた。三月の中旬、長身でやや色白の竹中広之は黄土色の作業衣姿で表に出た。爽やかな日差しが降り注いでいた。

ここは金沢市の郊外で、近くに田畑もある閑静な住宅地だ。これまで何度か登つたことのある倉方岳の頂上が、鮮やかに眺められた。早春の空気が、喉も肺も活性化されるように感じられた。

竹中の長男と長女はそれぞれ世帯を持ち、彼は二つ下の妻の奈保子と二人で、年金生活を送っている。彼女は垢抜けし、主婦業も完璧で申し分がないと彼は思っている。

竹中は七年前、金沢にある、中堅の商事会社を六十二歳で定年

大野町 大 勝 勝

退職した。その半年程前、奈保子は、

「あなた、定年になつたら何するの？」

と心配していた。それは、定年後、如何にして健康的に過ごすのか、ということと、定年と同時に年金が受給出来る訳ではないための経済的なことの二つの心配だつたようだ。彼女は手芸教室に通つたり、町内の行事などには積極的に参加し、いつも潑刺としていた。

「ま、その時になつたら考えるよ」

彼は楽天的に答えた。というのも、定年一年前から専務が、
「竹中さん、定年後も当分今の業務を継続してくれるよね」

と切望されていたのだった。

「ええ、使つて頂けるなら喜んで……。でも、極端に給料が下が

らなければ、ですが」

ライバル企業で活躍すると、会社も困る筈だ、と竹中は自負していた。それで少し強気に出た。専務は苦笑しながら、「それは分かっているよ」

と言った。そのことを、奈保子には話してなかった。希望を持たせておいて、後で事態が悪化すると、ダメージは大きいだろうと思つてのことだった。

定年退職時の週末、会社は竹中のために送別会ではなく、定年祝賀会を催してくれた。各出張所の社員も駆け付けてきた。専務らの祝辞や竹中の謝辞の後、司会役の指示による社員達の余興が繰り広げられた。竹中は、感謝の気持ちを込め、隠し芸のクラリネットで島津伸男作曲「加賀の女」を前奏も入れて演奏した。そのことは、事前に司会役と打ち合わせ済みだったが、他の社員の殆どは知らず、全くのサプライズだった。竹中は高校時代、吹奏楽部に所属していた。コンクールのソロの時のような緊張感は全然無かった。アルコールも入っており、間違えはそれも御愛嬌とばかり、気楽に演奏出来た。会社では、特に趣味も無く仕事一筋のように思われていたのか、上手さより意外性で場は盛り上がった。最後に、若手の女子社員から花束が渡され、握手された。永い会社勤めで、女子社員の手を握ったのはそれが最初で最後だった。思い出に残るイベントだった。が、次の週からも竹中はいつも通りに出勤し、いつもの席に着いた。そのことは、前もって社内に通達が回っていたので、殊更違和感がなかった。

彼は五年間、囑託として仕事を続けた。週休は三日、残業なし、休日出勤なし、出張なしの勤務形態になった。当初は少し戸惑ったが暫らくしてすっかり順応した。(以前は、よくあんなに働けたものだ)とさえ思えるようになった。給料は予想通りに下がったが、時給にすると、竹中の希望を遥かに上回っていた。彼はそれに応えて、誠心誠意勤めた。途中から給与の外、厚生年金も竹中の口座に振り込まれた。お陰で定年後も、予想外の貯蓄が出来、家計を任されている奈保子は満足していた。その上、肉体的にも精神的にも健康を維持出来た。

最後の半年は、中堅社員にスキルアップの指導と、ノウハウをデータベースに残すことが主な任務になった。

竹中は、最終日の業後、会社近くの飲食店の一室で、職場だけのこぢんまりした送別会を開いてもらえた。

竹中にとつて思い残すことのない会社生活だった。就職してから、初めての無職の境地へ無事ソフトランディング出来た。奈保子は、

「永い間お疲れ様でした。これからは、あなたの大切な時間を自由に使ってください」

と労ってくれた。竹中が、以前から憧れていた、悠々自適生活の到来だった。

一年前、高校の同期会の通知が届いた。金沢の奥座敷とも呼ばれる湯涌温泉での一泊二日だった。是非会いたいと思う特別の同期生はいない。男子生徒に人気があったマドンナはすっかり変わ

り果てている。幸か不幸か、美人と不美人の差は年々縮まるような気がする。長年、会社という群れにいたが、別段群れが恋しくなってもいない。それでも、わざわざ幹事達が企画したのだから、「行つてよいか」と奈保子に言った。彼女は、「行つてらっしゃいよ。あそこは神経痛、慢性消化器病、糖尿病などにも効能があつて泉質がいんだつたわね」

と言つた。その時も今も、別に湯治の必要性を感じていないが、参加に○を付けて返信した。「宵待草」の作詞や美人画で有名な竹久夢二ゆかりの地でもあるのに心が動いたのかもしれない。

当日、竹中は旅館に着くと、真つ先に、今回の副幹事になつて藤岡譲二（むつおかじょうじ）に会費を払つた。中背で浅黒い彼は、出席者名簿に受領のチェックマークを付けていた。竹中は、払うものは先に払わないと落ち着かない性格だ。それより、集金に回つてこられる前に支払つた方が気持ちいい。

十八時からの宴会までにまだ時間があった。竹中は、宛がわれた部屋で宿の浴衣に着替え、大浴場に向かつた。

浴室につながつた露天風呂から、山山や、浅野川の支流湯ノ川、手入れの行き届いた庭などの風景を楽しんだ。そよ風に竹の葉が揺れていた。

宴会は定刻に始まり、男女合わせて三十人余り集まつた。畳敷きの和室だが、椅子とテーブルの席だった。こういうスタイルには、当初、アンバランスを感じたが、何時の頃からか、すっかり馴染んでいる。脚などにトラブルを抱えている人は助かるだろう。老人会の行事のような雰囲気もした。大部分は無職だが、中

にはまだ仕事に就いている者もいた。近況、持病、大病克服、孫の話など話題は尽きなかつた。老後とは何歳からをいうのか分からないが、六十八歳にして老後の夢を語る者もいた。

優等生でもなかつたが、小学校の校長で定年退職した同期生もいた。彼は（我こそは出世頭）と言わんばかりに幅を利かせていた。細君に先立たれて、一人暮らしをしているそうだが、精一杯強がつているのかもしれない。竹中は大手M新聞か何かで読んだことのある川柳をふと思ひ出した。

（幸せは出世じゃないね同窓会）

（同窓会奴もしぶとく生きていた）

（歯の数を自慢しているクラス会）

（生き残りゲームみたいなクラス会）

（バアさんに「くん」で呼ばれるクラス会）

竹中の所へ藤岡が酌に回つてきた。彼とは格別親しくしていた訳ではなかつた。ちよつと狡賢いイメージがあつて、竹中はあんまり好感を持っていなかった。彼は尋ねてみた。

「藤岡さんの楽しみは何かね？」

「一番はやはり球技かな。もつと腕を磨かなければ、と思つていよるよ」

思い返しても、彼が体育系で活動していた記憶がない。

「球技つて？」

「ま、パチンコとも言うけど……」

竹中は両隣にいた友人と大笑いした。どうやら竹中とは無縁の世界に身を置くことがあるようだった。

「竹中さんはどうなんですか」

竹中は読書、クラシック音楽鑑賞、クラリネット演奏、バス旅行、美術鑑賞、庭木の剪定など下手の横好きと思える楽しみがある。

「何番目になるか分からないけど、家庭菜園は楽しいな。新鮮な野菜が取れるし、体を動かすと健康でいられそうだし……」

藤岡は、うんうんと頷いていた。

「ただ、最近では体力の衰えを感じるので、耕運機を買いたいのだが結構高くてね」

「俺は、実家の兄貴の手伝いで耕運機を使うことがあるんだが、手作業での家庭菜園は厳しいなあ。高いって、いくらぐらい？」

「二、三馬力のミニ耕運機じゃ物足りないのよ、どうせなら七馬力程度にしたいんだ。JAの散らしでは約四十万円なんだよ」

「へえー、そんなにするのか。知らなかったなあ」

年金生活者にとって、清水の舞台から飛び降りる程の勇気が要る。

やがて、カラオケの機械にスイッチが入り、幹事が口火を切った。読経か朗読のような感じだが、最近大ヒットしている難しい曲だった。結構歌い込んでいると見えて、まずまずの出来だった。

元校長も負けじとばかりマイクを取った。それは何とも酷い音痴で会場が大いに沸いた。決して、受けを狙った演技ではなく、誰もが認める彼の実力だった。これで自信が付いたらしい連中は、次々と曲番号を予約した。上手でもなく、下手でもない並の歌の時、大方は、曲が終わる度に、隣の人との会話を一時止め、さも

聞いていたかのように拍手した。歌い終わった本人も、その拍手にご満悦だった。竹中はカラオケを聞くのも歌うのもあまり好きではない。彼は、新しい歌をさほど知らないし、古い歌は飽きられると思っている。竹中は、幹事達が熱心に世話を焼いてくれたお札の気持ちも込めて、はやりすたりがなく、お座敷に合う、無難な民謡を一曲だけ歌った。宴会場は次第に騒然となり、会話もままならないようになっていった。

参加したくても出来ない事情のある同期生もいたことだろう。竹中は、歳相応の元気で平穩に暮らしていることを有難く思った。

翌日、彼は朝風呂を浴び、帰り際、旅館の売店で奈保子に和菓子のお土産を買った。間違いなく同期会に参加した証拠のために、では決してない。

同期会から一箇月程立つた頃、藤岡から珍しく電話が入った。「どう？ 元気にしている？ 耕運機は買ったのか？」

「いやあ、まだなんだよ。迷いながら悩んでいるところだ」

「そうか、実は中学の先輩で、中古の耕運機を十八万円で購入したという話があるのだけど、要らないかい。七馬力なんだ」

竹中にとって、喉から手が出そうな話だった。内心、（よし、決めた）、と思ったが、一応、

「じゃ、いつか都合のいい時に一度見せてもらいたいな」

と言った。藤岡は、

「では、明日の午後にもも持っていくから見てもらおうか」

と言つて電話を切つた。

竹中は、何年製か聞かなかつたが、ま、中古でもいいや、新品の半値以下で買えるなら、と考へた。何分、この後、自分がどれだけ元気でいられるかも分らないのだから……。

問題は、奈保子がどう言うかだ。(何もそんな大金出さなくて、今まで通り手作業でいいんじゃないの。どうせ暇潰しのお遊びなんだから。一挙に土起こしをする訳じゃない、それぞれの作物の植える時期に耕せばいいんですよ)、と一蹴されそうな氣もした。そう言われても反論の余地はない。

彼女は料理が専門で、畑作業には滅多に手出ししない。指が荒れると、手芸に悪影響するそう。それでも、園芸の一般的な常識だけはもつていそう。

その日、彼女の機嫌の良さそうな時を見計らつて話を出した。

奈保子は、

「あら、安いわね。友達の話だと、中古で大体二十五万円が相場らしいのよ。お買い得だと思つたら、見て氣に入つたら購入しなさいよ。絶好の機会を逃しちゃ駄目よ」

と、賛同してくれた。それもその筈、直接の出費なしに、生鮮な野菜で、愛する夫(と竹中は思つてゐる)のために、得意の料理が出来るのを、誰よりも喜んでゐたのは彼女だつた。どうやら、竹中の取り越し苦労だつたようだ。

奈保子の話によると、手芸教室の友達何人かは、旦那が家庭菜園をやつてゐるらしい。大抵は耕運機を持つてゐるそう。竹中も無理して腰痛にでもならないよう、何れは耕運機が必要だろ

うと思ひ、彼女はその関係の情報収集を心掛けていた、と言つた。奈保子の話を聞いて、彼は菜園に一層意欲が湧いた。中古で二十五万円というのは、業者の儲けも含むから、妥当なのだろう。そう思うと、確かに割安だ。あとは、錆だらけで、スクラップ寸前の代物でないことを願うだけだつた。

翌日の午前中に、竹中は運送費と謝意を含め、取り敢えず二十万円用意した。さらに、納屋の一角を片付け、耕運機の置き場所を設けた。

午後、藤岡はトラックに耕運機を付けてやつてきた。竹中は、

「畑で試運転してみたい」

と言つと、藤岡は畑の横へトラックを着けた。荷台の後に農機用アルミブリッジを掛け、器用に所定の場所へ下ろしてくれた。青とベージュのツートン・カラーで洒落た感じだつた。少し土がくつついたままの所もあつたが、外観は極めて良好だつた。傷んだ箇所など見当たらなかつた。持ち主が高齢化し、農作業を止めたのかも知れない。それは、竹中にとつてどうでもいいことだつた。燃料はタンクに半分入つてゐた。

竹中は、最近記憶力には自信が無く、人と会う予定の時、細い鉛筆とセットになつた手帳を携行するようにしている。取扱説明書は紛失してゐるそうなので、彼は藤岡の説明を聞きながら手帳にメモした。

竹中は藤岡から教わつた操作の仕方に従つてエンジンを始動し、農道で直進やカーブの前進、後退の走行を試してみた。その後、畑に入り、空いてゐる場所で、ローター(回転刃)のギヤを

入れ、実際の耕運をやってみた。使い易いことが十分納得出来、すっかり気に入った。

付属工具は機械本体に収納されていた。給油箇所には分かりやすく銘板が貼られていた。藤岡の説明で大体理解出来、使いこなせると思った。

「なかなかいいね。運賃も含め、二十万円で売ってもらえないか？」

藤岡は手を左右に振り、

「とんでもない、十八万円でいいんだよ」

と強引に言い張った。

「そうか、悪いな。ありがとう」

藤岡は十八万円受取り、ブリッジを荷台に乗せ、トラックで帰っていった。竹中は（あいつ、いい所があるなあ）、と、これまであまり好感情を持っていなかったが、すこし見直す気になった。

竹中は、これで鍬による土起こしから解放され、自分、家庭菜園を楽しめると思った。彼は、中古業者に当たってみる、という選択肢を全く思いつけていなかった。

竹中は、欲しいと思っていたものが手に入った喜びを、久しぶりに味わい、異常に気分が弾んだのだった。

黄土色の作業衣姿の竹中は納屋に入り、耕運機に燃料を補給した。給油箇所に油を差し、エンジンを掛けた。その後、藤岡には会っていないが、彼の口利きで入手したお気に入りの機械で、菜園に向かった。

彼は、長方形の畑を縦方向に耕した。年の最初の作物であるジャガイモを月末には植えたいのだ。

栽培は、連作出来ない作物もある。前年の資料を確認しながら、どこに何を植えるか、レイアウトを考えなければならぬ。それは重要であり、また彼の楽しみでもある。

畑の端では、曲がる側のクラッチレバーを握りながら、ハンドルを持ち上げてローターを浮かせ、Uターンした。

耕した土の中から、焦げ茶色の蛙が一匹突然飛び出した。（おう、すまん、すまん、まだ冬眠中だったか）彼は耕運機を止め、孫達遊びに来た時使っていた「たも網」を持ってきた。蛙をその中に追い込み、少し離れた空き地の草むらに放した。蛙は害虫なのか益虫なのか、そのどちらでもないのかは知らない。縦方向に耕した後、成る丈土を細かくするため、横方向にも耕す積もりだ。その時、蛙がローターで重傷を負い、苦しみながら死んでいったりするのを忍びない。

竹中は畑全体の耕運を終了すると、家に帰り、ホースを表の水道につないだ。ブラシで丁寧に機械を洗った。今後、まだまだ稼働してもらいたい思いなのだ。少なくとも彼の足腰がしっかりしている間は……。

梅雨に入った。ジャガイモの収穫は間もなくだ。ゴールデンウィークに苗を植え付けたナスやキュウリは実が取れるようになっていた。サツマイモの苗は植えた直後、ぐったりとしていたが、日が立つと次第に元気になり、順調に生育していた。

しとしとと雨の降る日、竹中は車庫で車のトランクルームを整理した。底に敷かれた新聞紙は汚れていたのを取り替えることにした。新聞は昨年のものであった。捨てるために折り畳んだ時、「耕運機で怪我」という小さな記事が眼に付いた。(へえー、耕運機で怪我することがあるんだ) と思いながら、ざっと眼を通した。が、詳細は分からなかった。何となくそれを捨てずに避けておいた。

竹中はトランクルームの整理を終え家に戻った。汚れた古新聞をもう一度読み返してみた。怪我をされたのは、野々市市佳山町の大原博実さん(七十歳)となっていた。(俺より二つ年上か、体力的には大差なさそうだが)

竹中はどういう状況で事故が起きたのか気になった。機械の不具合だったのか、それとも操作ミスだったのか。

彼は、初めて使う機械や道具の場合、必ず取扱説明書をじっくり読んでから手を出すことにしている。しかし、竹中の耕運機には説明書が無い。安全上の注意を藤岡は漏らさず伝えてくれたかどうか疑問だ。

電話帳には大原博実という名前が載っていないかった。同町で載っていた大原姓は一軒だけで、下の名は慎吾だった。とすると、登録してあるのは息子なのだろうか？ 一応、その電話番号と番地をメモしておいた。

住宅地図で捜してみると、大原慎吾宅は大通りに面した分かり易い場所のようだった。そこまで調べてから数日立った。

竹中は、その内忘れてしまうかと思っていたが、妙に心に引っ

掛かっていた。危険防止のため原因を探求しておきたい、という思いが募った。

どことなく浮かない顔でもしていたのだろうか、奈保子は、「どうしたの？ 何か考え事でもしているの？」

と突いてきた。彼は古新聞を見せて訳を話した。彼女は、「後学のために、原因を教えてもらえたらいいね」

と真面目な顔付きで言った。その言葉に押されて、竹中はメモ紙を取り出し、電話してみた。

「金沢市の竹中と申しますが、突然すみません。昨年の新聞に載っていました。が、耕運機で事故があったのはお宅でしょうか？」

「はあ、そうですが……」

竹中は、自分も耕運機を使っているので注意したいのだが、詳しい状況を伺い上げたい旨を頼んで了解を得た。

翌日、彼は、菓子折りを携えて大原家に向かった。多分、思い出したくもないだろう話を聞かせてもらうのだから、手ぶらという訳にはいくまい。

住宅地図通りで、目指す家は直ぐ見つかった。広い敷地に、趣のある平屋建ての住居の外、ガレージと納屋があった。

応接間風の部屋に通された。濃厚な感じの大原に挨拶している時、奥さんらしい方が見え、お茶を出してから部屋を出ていった。薄いピンクのソックスを履いた彼女の足が、中学生のように小さく可愛く見えた。

大原の話によると、畑の端でUターンしている時に、手が滑り、浮かしていたローターが足の上に落ち、小指の先を切り落として

しまった、というのだった。

「数年前に、家内も耕運機を使ってみたと言っているので教えてやっただのです。時々使っていたのですが、まさかこのようなことになるとは……。今は後悔していますが、後の祭りです」

竹中は、事故が起きたのは男性だとばかり勝手に思い込んでいたのだが、奥さんの方だったことを、この時初めて知った。

「所用を終え、帰ったところで、近所の方から家内が救急車で病院へ運ばれたことを知り、すっかりうろたえましたよ」

竹中は想像するだけで、身の毛がよだつ思いだった。彼は、ローターを浮かす時、脚などが触れないよう、無意識で注意していたが、これからは手も滑らないよう十分気を付けなければならぬと肝に銘じた。

「家内は、それまで友達とよく温泉旅行を楽しんでいたのですが、今は滅多に行かなくなりました。小指の先のない足を好奇の眼で見られるのが嫌なんですよ」

竹中は、それが分かる気がした。特に女性はそういう気持ち強いのもかもしれない。

「家内が入院した直後に、私の知人が見舞いに来てくれたんです。私は彼に、一刻も早く耕運機を処分してくれと頼んだんですよ。

眼に入るのが辛くてね。私の従弟が白山市で、車のレンタル業をやっているんですが、その車を使ってもらって、知人はてきぱきと片付けてくれたんです」

大原は、彼の知人に謝意を抱いている風だった。

「あいつはいい奴なんです。中学の二つ後輩の譲二を、いつも譲

君と呼んでいるんです。藤岡というんだが……」

竹中は「えっ！」と心の中で叫んだ。それでも冷静を装って言った。

「大変だったんですね。これからは、私も用心して操作します。因みに、その耕運機はおいくらで手放されたんですか？」

「いいえ、代金など欲しくなかったです。譲君は素早く処分してくれたので、手間賃を取ってくれ、と言ったのですが、固く断られました。彼がどのように処分したかはしりませんし、知りたくとも思っていません。その後に出てきた説明書さえ、急いでリサイクルの古紙に出しましたよ」

竹中は、
「貴重なお話を大変ありがとうございました」
と礼を言つて菓子折りを差し出した。

「これはどうもご丁寧に。お役に立てば幸いです」

竹中は帰り道、全神経を集中してハンドルを握った。ともすると、考え事にふけて、信号を見落としそうになるからだった。

彼は、無事帰宅出来た。ほっと一息ついたが、そのような気持ちになつたのは、これまでに経験がなかった。

家に入ると、奈保子から「どうだった？」と聞かれた。彼女は、折角出掛けていって収穫があったかどうか気になっていたようだった。

「ああ、参考になる話だったよ」

彼は事故の概略を説明した。が、その機械が、現在、我家の納屋に収まっていることに言及しなかった。これから先のことに頭

が整理されていなかった。奈保子の、「あなたも気を付けてね」

で、その話は終わった。

竹中は、藤岡がどこから十八万円という値を付けたのか分からなかった。新品の半値マイナスαと勝手に価格を設定したとしか考えられなかった。あの十八万円はパチンコ屋の売上に貢献したことだろう。それで藤岡が生き甲斐を感じ、健康寿命が伸びれば、国の医療費節減につながるのだ、と考えることにした。

それにしても、藤岡という男はやはり好感の持てぬ奴だと改めて感じた。人に感謝されるボランティアのような素振りを見せながらしつかり小遣い稼ぎをしたのだろう。にんまりとほくそえんだ顔が眼に浮かんだ。今後、彼とは距離を置いて付き合おうと思った。竹中が大原と面談したことを、藤岡はその内、耳にするかもしれない。それでも、竹中は別段気にならない。彼がいつか藤岡と会うことがあっても、自分の口からあの件には触れない積もりだ。藤岡の方から話があれば適当に受け答えるだけだ。

それよりも、竹中は、曰く因縁付きのあの耕運機を、これからも使うことに抵抗があった。藤岡がトラックで持ち込んだ時、気が付かなかつたが、ローターに博美さんの血痕が付着していたのかもしれない。

何かのたたりが起きては堪らない。二度あることは三度ある、と諺はいう。一度あることは二度あるだろうか。

竹中家は、代代仏教徒だ。奥の座敷には、竹中が物心ついた頃から年代物の仏壇が鎮座している。彼は、特別熱心な信者という

訳でもない。が、盆前と暮には、お磨きを欠かさない。そのくせ、クリスマスにはケーキを買い、初詣には神社へ出かける。

白山市の白山比咩神社は「白山さん」とも呼ばれ、親しまれている。うつそうと茂る老杉に囲まれ、夏でもひんやりした感じだ。

竹中は、車を買ひ替える度に、必ずそこでおはらいを受けた。運転するようになってから数十年立つが、お陰で無事故だ。大層御利益があると信じている。あそこで一度耕運機のおはらいをしてもらえばいいのだろうか？

それとも、不本意だが、安価なミニ耕運機の新品を買ひ、あれを下取りしてもらおうか？

竹中の葛藤が始まった。彼は思い悩んだ。果てしない堂々巡りの渦に巻き込まれ、どこか落ち着きを失くしていた。

数日後、奈保子が言った。

「あなた、顔色がすぐれないけど、具合でも悪いの？」

竹中は、意を決して口を開いた。

「家の耕運機は、実は、先日話した、野々市市で事故を起こしたものだ。縁起が悪いから、もう使うのやめようかどうかどうしようか迷っているんだ」

奈保子はさぞ驚くことだろう。眉間にしわを寄せ、（まあ、なんてことなの、いやだわ、さっさとおはらい箱にしまさいよ）と言いつつ、彼女は、

「あら、そうなの。別にいいんじゃない。耕運機に罪がある訳じゃない。使う度に、事故の話の思い出して、気を引き締めたら良いのよ。縁起のいい機械だわ」

と返してきた。

そうか、そういう考えもあるか。彼は、垂れこめていた暗雲が、強風で一気に吹き飛んでいったような思いだった。

竹中は、最良のパートナーに恵まれ、自分の人生はこれで十分だと改めて思った。だが、藤岡に好感を持ってない気持ちは今も変わらない。

次の耕運機の出番は益過ぎだ。ダイコンの種撒きの準備をする予定になっている。博実さんの災難の話を思い出し、二の舞にならないよう慎重に運転しよう。縁起の良い、中古耕運機、頑張ってくれよ。

